

あ と が き

財団法人中央教育研究所
所長 水沼文平

受賞されました先生方、おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

中央教育研究所は、東京書籍の委託を受けまして、1984年にスタートしました東書教育賞の第1回目から論文の審査を行っております。

今年度の応募論文は昨年度より34編多い244編でした。昨年からのリピーターの先生方も50人を数え、東書教育賞が先生方の実践研究の上で大きな励みになっている感じがいたします。

さて教科・領域ごとの応募数を昨年と比べてみますと、小学校は国社算理がほぼ同数ですが、外国語活動と特別支援教育が大幅に減少しています。中学校では理科が6編から20編と大きく増加したことが目立ちます。小学校の先生方のご多忙振りはお話には伺っていますが、従来の授業や業務に加え英語や特別支援教育がかなりの過重になっているのではないかと懸念されます。そういう中でも、このようなすばらしい論文を多数応募された皆様に心より敬意を表します。中学校理科の大幅増加は、PISA（ピサ）などの結果を受け理数を重視するという国の方針の表れではないかと思われま

す。私の個人的な考えですが、小学校のこのような過重、中学校の理数重視を考え合わせますと、極端な理想主義、その対極にある即効性や対症療法は、教育の場においてははかばかものか、教育の主体はあくまでも子どもたちにあり、その成果は未来に置かれるべきであると考えます。

昨年3月11日の東日本大震災により、私たちは自然の持つ破壊力を再認識し、科学・技術への過信を反省することになりました。インドのマハトマ・ガンジー首相が残した「7つの社会的大罪」の中で「人格なき学識」「人間性なき科学」を挙げています。まさに、今回の原発と放射能問題を考える上でキーワードとなる重要な言葉であると思います。学校現場においても今後、原発や放射能問題は避けては通れない課題であると思いますが、このガンジーの考えは私たちに大きな示唆を与えてくれるものだと考えます。

中央教育研究所では大震災復興支援の一つとして、原発20キロ圏内からの避難児童生徒に元気を出してもらうために講師を派遣しております。一例を挙げますと、東京大学名誉教授の水野丈夫先生にお願いしまして、小学校の高学年を対象に「いのちの始まり」という授業をしていただいております。かなり高度な発生学に関する内容を水野先生は平易な言葉で、映像、ホワイトボード、小道具を使ってお話をされました。子どもたちは真剣に話を聞き、終わってから水野先生はサイン攻めにあっていました。その後、子どもたちひとりひとりから礼状が届き、質問として「世界で生まれる男女の割合はどうなっていますか」「双子の赤ちゃんは胎盤は何個ですか」「犬や猫が一度に5、6匹生まれるのはなぜですか」などがあり、水野先生から丁寧な回答が送られました。

今回応募されました論文には、教科教育だけでなく人間教育に取り組んでおられる先生方の姿を見ることができました。昨年3月11日以降、私たちの価値観に大きな変革が求められています。こういう時こそ次代を担う子どもたちの教育が最も重要となります。先生方のさらなるご尽力をお願いしたいと思います。

最後に、ご応募をいただきました多数の先生方、そして、ご多忙の中、ご審査にあたっていただきました先生方に御礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。